

チューリップ



北薩の春は、あつと云つ間にやつてくる。四五日前まではストーヴを焚いて、キルトの上つ張りなど着込んでいたのに、今日あたりはトレーナーに素足で平気である。少し芽がふくらんだかと思つていたあちこちの岩ツツジが、透明なピンクの花を一斉に咲かせて、れんぎよつ黄色にさえさえと映え、春春と心を浮き立たせる。

もつとも油断は禁物で、一昨年だったか暖かさに騙されて春の木市で野菜の苗をどつさり買い込んで植えたところ、四月上旬に霜の日があつて全滅させた苦い思い出がある。その点冬越しした野菜や、球根類は丈夫なものである。一昨年植えたチューリップも寒の内から顔を出し、小振りの分厚い葉を縮こまらせながらも間に蕾を包んでいる。

チューリップは子供の頃からの憧れの花であつた。三つの尖つた山を描きくると下に丸い線を引くとチューリップの花である。長い茎を描きその下から二枚の大きな葉を付けると出来上がりで、お河童頭の女の子と並べてよく描いたものだった。小学校で最初に描いた絵も、画用紙を縦にして女の子がチューリップにじょうろで水をやっているところだった。右上には赤い太陽が、左側には大きな字で「ノハヤマザキテイコ」と書いたその絵は、教室の後ろに張り出され、今もまざまざと睨に浮かぶ。

チューリップといつても絵本の絵や写真で見たばかりで、信州の路地には全く見かけなかった。当時は今より寒く、凍つく大地では育たなかつたのだろう。実物を見たのは、三年生の時、母が東京から女子大時代の友人が来るのだと言つて、二本買つて部屋に飾つたときである。大輪の黄色のそれは、ガラスの花瓶に挿されて、明るい表座敷によく似合つた。ここの当たつた髪に縞柄の着物を着た婦人が、座卓に身を乗り出して母と楽しげに話していた光景も幻のようだ。やがてそのチューリップはお仏壇に

移り、花卉ががっくりはずれて、残念に思ったものだった。

結婚して十年ほどした頃の夏、内職に始めた学習塾が大繁盛して、2DKの公団住宅では手狭になり、一戸建ての家に移った。その建物は、戦時中に工場が疎開したために建てられた小西六（さくらフィルムの課長住宅で、材料が粗末で傾いてはいたが、和室が四部屋あつて、庭も広々としていた。その家の庭は、柿の木も五本、梅や梨も植えられていた。私はすでに三人の子持ちで長男は五年生、長女は四年生、下の子は三才であつた。古くても広い家に大喜びの子供たちは、団地で飼っていた猫のほかに犬も飼いはじめ、その数もどんどん増えた。

私は庭の真ん中を花壇にして、あれこれの球根を植えた。子犬はほじくり返すし、手入れは行き届かず花壇とは名ばかりだつたが、春にはチューリップの芽が顔を出した。グラジュオラスやダリヤの成績はよくなかつた。暖くなって色とりどりの花が咲いた。バルコニーに洗濯物を干しながら、横目で眺めるのも楽しかつた。四人目の子も生まれて、いた

ずら盛りの子供たちの洗濯ものに加えて、おむつが増えていた。あの忙しさを乗り越えて来たのは、単なる若さだけではなかつたと今にして思う。

入社して間もなく父となつた夫の給料の三分の一は公団の家賃に消えていたが、一戸建ての家ともなれば家賃は給料の五分の四ほどにも当つた。しかし入れ代わり立ち代わり来る塾生の数は六十人にもなつていて、収入は夫の給料の三倍ほどはあつた。忙しい分だけ余分な支出もあつたが、生活費の殆どは私の肩に懸かつていたと言える。その重圧にも耐えて頑張つて来たのは、一重にわが子への夢だつたと思つた。

私も父母の夢を背負つていた。それが生活に追われて何も果たせない。その分も加わつた重い期待をわが子に懸けた。私が今この年になつて考えても、長男は天才と言えた。その子を夫の郷里の家を継がねばならないのだからと、わざわざ東京から鹿児島ラサール中学に入学させたのだ。半年ほどの受験勉強だけだつたから、長い間の勉強を経てきた仲間とは基礎的な学力に大きな差があつたのだらう。それ

に、それまでを友人や犬、猫とのびのび過ごしていた彼には、勉強と試験に明け暮れていた寮生活がたまらなかつたのだと思う。

遠く離れて、親の知らぬ間に彼は大きく軌道を外れていた。高校生になると、休みもそこそこに鹿児島に戻って行った。彼はロックのドラムに熱中して先輩や他校の生徒と仲間を組んで、ロックのコンテストに挑んでいたのだ。もう勉強どころではなかった。

学資のために昼の会社勤めも始めていた私だった。何回も引越しをしたにもかかわらず、塾の子供たちは付いてきてくれたから、帰るとすぐに塾の勉強である。間を縫って夕食の準備、夕食後は中学上級の生徒の組である。日曜日には高校生も来る。五人目の子も生まれた。この極限近い忙しさの中で、母の思いはついに長男には伝わらなかつた。逆に言えば子供の思いが私に伝わらないというのだろつか。しかしましたと思う。子が親を思う気持ちは親の子へのものには比すべくもない。順送りなのだ。

* * * * *

いつの間にか、昨秋植えた赤、黄、ピンクのチューリップが開いている。黄色のそれは八重で、小振りの牡丹のようだ。窓から眺めていると三十年前の庭が目につく。花びらがゆるんできた風情がなんとも婀娜っぽくて年増の魅力とはこんなものだろうかなどと考えていたのも昨日のように思える。

この春、最後の子が大学を卒業して、祖父の遺志を継いで仏の道へと船出する。どんな波瀾が待っているかは想像もつかない。ただ私はそれぞれの子供のために全力を尽くして来たと言え、胸を張って言える。忙しい中でのやり繰りが、子供達には不満だったり、不足に思えたりしているかもしれない。ただ私は、どんなに困っても亡き舅や叔父たちの願ひ通り、夫の家伝来の田畑一枚も手放すことなく頑張つて来たし、姑への送金も毎月欠かさなかつた。親族の中心としての家を立派に建て替えることも出来たことも嬉しい。そしてまさに「自分を褒めてやりたい」と思うこの頃である。

(平成9年3月)